

ぎの凍る奉天の初春に、乾板の入れかへから始めて現像の末に至るまで手にかけてたもので、今から追憶すると、よくもあんな肉體労働に堪へたものであつたと思ふ。今日此等の資料は新進の學徒によつて熱心に研究せられ、清朝興起史や東方言語研究の上に、重要な役目を勤めて居る。この始末については曾て湖南博士が講演せられたことがあり、余もまた簡略ながら書いたこともあるから（支那學第七卷第三號參照）、こゝには述べぬ。

大正三年八月歐洲大戰の序幕切つて落された頃に、露西亞は莫斯科のルミャンツェフ博物館の閉ざられた門を叩いて、そこに藏せられる經世大典站赤門の一篇を抄寫したことも、自分だけには生涯忘じ難い記憶である。これについては文藝春秋に走り書きを載せたから、重ねて記さうとは思はない（編者注本書「莫斯科抄書の思い出」參照）。

スタイン、ペリオ、ル・コック諸氏の中亞探檢によつて蒐集した記録文書の類を、大正九年十年にかけて倫敦巴里伯林などで閲覽し、その主要なるもの百種ばかりを寫眞若しくは抄寫し得たのにも、かなりの苦心を拂はさせられた。當時倫敦では、スタイン氏の三回に亙つて蒐集した中亞資料は大英博物館に置かれてあつて、漢文や中亞の古代語で書いた資料の整理はまだ完成せず、前者はリオネル・ジャイルズ氏が専ら整理の任に當り、後者は梵語學者のバーネット氏の管理下に置かれてあつた。無論目錄が編纂されてゐないのだから閲覽を願ふものは此等の諸氏に個人的に依頼して、その希望の種類のものを、先方の心任せに見せて貰ふ外に方法はない。ところで誰でも同じことだが、自分の整理中とか調査中とかで、まだ充分に手の届いてゐない資料などは、餘り他人に見せたくないのが人情である。だから此等の兩氏にしても、固より來訪の閲覽希望者を喜ぶ道理はなく、大概は普通の佛典類か、特に希望する種類中の格別重要でもないもの幾種かを見せて引取らせ、一寸變つたものを出してくれと頼むと、好